
とある無能の集積強撃 《heap break》

怪力乱神

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある無能の集積強撃《h e a p b r e a k》

【Nコード】

N 6 0 4 0 Y

【作者名】

怪力乱神

【あらすじ】

少年、瀬野宗也^{せのそうや}は普通に生きていた普通の少年であったが、ある時神様のミスによって命を落としてしまう。

せめてものお詫びに、と神様に転生させてもらい、大喜びした宗也であったがそこはなんと『とある魔術の禁書目録』の世界だった！！さて、宗也は死亡フラグびんびんなこの世界でどのような物語を繰り広げるのかーーーーー

科学と魔術が交差し、そしてそこへ瀬野宗也が加わる時、物語は大きく動き出す！！

プロローグ（前書き）

つい、書いてしまった。

プロローグ

目を開けると、そこは真っ白な何もない空間だった。

そして、眼の前では気の強そうな女の人が仁王立ちしている。

・・・すまん。省略しすぎた。

とりあえずこうなったいきさつを話そう。

えっと、100円玉が財布から落ちて転がって行ったので、取りに行ったら電柱に激突しました。

その後の意識は皆無ーーーーー

・・・笑えよ。

まあ、いいんだ。

意識の失う前の俺の行動なんて、1日前、家の前を歩いていたアリの数くらいどうでもいいんだ。

問題は、今。

先ほども言ったが、俺の目の前には女の人がいらっしゃる。

まあ、二次小説的に言えば神様で、転生とかだね。

と、一人考えていると、女の人から声が上がった。

「・・・すまん。」

え？

まさか本当に・・・俺、死んだのか？

「私のミスでお前を殺した。反省はしているが後悔はしていない。」

「それが間違えた神の態度かああああ！！！！」

うむ、ついつい突っ込んでしまった。

だってさ、何その態度。

「ほお、よく私が神だとわかったな？」

「あれそこに目をつけるの……」

逆切れとかすんのかな……って思ったんだが。

あ、言い忘れてたけどこの人の容姿、

まんまISの千冬さんっす、はい。

だからIS好きな俺は内心テンションMAXだぜヒャッハアア!!

・・・ん? どんなミスで殺したんだ?

「ああ、それは私が大好きなエクレアを食べているときに中のクリームを落としてしまったな。それだけだ。」

「俺はクリームに殺されたんだな!？」

くそ・・・一生の不覚。

まあもう死んでるが。

「とりあえず殺してしまったのは確かだ。元の世界に戻ることはできん。よってお前を転生させる。」

きたっ!!

どんな世界に行けるんだ!?

やっぱり容姿からして『IS』かな!?

「お前には『とある魔術の禁書目録』の世界に転生させてもらう。」

「容姿関係なかった!!」

まあ、それはそれで嬉しいが。

神様はそれだけ言うところ言った。

「それじゃあ、さよなら。」

すると俺はほかの二次小説の事を思い出す。

(たしか床とかが開くはず・・・!)

だが、何秒たっても一向に変わらない。

「・・・えっと、これってどうやって転生するんすか？」

「安心しろ。」

そう言うのと神様は不敵な笑みをうかべる。

「君の思った通りだ。」

「えっ!!！」

そう神様が言うのとパカッときれいに床が二つに割れた。

当然、足場のない場合は、落ちるのみ。

「うおおおおお!!！やっぱるかよおおお!!！！」

「とりあえず生き延びられるように適当に能力つけといたから。そ

れじゃあ、がんばれ。」

それを最後に俺の意識は途絶えた。

☆
★
☆
★
☆
★

目を開けると、知らない天井だった。（あれデジャブ？）

「ここはどこだ・・・っと、俺転生したんだっけ。」

鏡を確認――元の容姿のまま。

とりあえず傍にあったバックを確認。

中には生徒手帳と制服、そのたもろもろが入っていた。

・・・見る限り俺当麻と同じ高校だね。

「あっ！そういえば神様は能力があるって言ってたよな・・・」

俺は神様の一言を思い出し、早速能力を確認。

ん？ただ目を閉じて考えただけ。

そうすると頭の中に能力が浮かんできた。

『不死』

『力を溜める程度の能力』

・・・神様、これ超能力ちゃう。

こうして瀬野宗也せのそふやの物語が始まった。

主人公設定（前書き）

主人公設定です。

主人公設定

名前

瀬野宗也
せのそうや

身長・体重

170cm
70kg

容姿

髪は色も髪型もBLEACHに出てくる黒崎一護。

目は少しつりあがっている。

世間一般でいえば、ややイケメン。

性格

意外と話しやすい性格。

友達には優しいが、自分が敵と判断したものには容赦なく攻撃をしかける。

無類の辛いものの好きであり、普通にラーメンなどを食べるときはトウガラシを少々ではないほど 入れる。

趣味

当麻いじり。

本人いわく反応がすごくおもしろいらしい。

能力

『不死』

どんな事をされても死なない、死ねない。

たとえ身体を吹き飛ばされようが燃やされようが、どんなになっても再生する。

ただし、『不老』は入っていないため、普通に歳はとる。

『力を溜める程度の能力』

名の通り、身体のあらゆる所に力を溜めることができる。

溜めている箇所は10秒ごとに耐久力や破壊力が上がっていく。

溜められる量に制限が無いため、時には地球を破壊しかねないほどの威力をもたらすこともある。

溜められる箇所は、一か所のみ。

主人公設定（後書き）

とりあえず、こんなものです。

次の投稿は、土曜日の予定です。

それでは、また次回。

第一話 『初日から波乱万丈』

「・・・不幸だ。」

つめた～いやらあったか～いやら書いてある自動販売機の前で、男は言った。

「まあ、いつもどおりだな。今日も平和だ。」

「俺の不幸を日常にしてんじゃねーよ！・・・くそ、唯一の札だったのに・・・」

もう一人の男がニヤリと笑みを浮かべながら言うと、男はさらにへこみ、ついには地面に手をつき項垂れた。

いわゆる、orz状態。

そんな男を笑いながら見ているのは、今日転生したばかりの男、瀬野宗也。

そして、地面で項垂れているこの男は、『イマジンブレイカー幻想殺し』を持っており、
「とある魔術の禁書目録」の主人公、上条当麻。

この二人がこういう状況になったわけは、朝、宗也が転生した頃まで遡らないとわからない。

それでは、振り返ろう。

とある無能の集積強撃《h e a p b r e a k》

第一話 『上条当麻の憂鬱』

「はぁ・・・超能力使えるぜひゃっほお！と思ったらまさかの東方
かよ・・・マジテンション下がるぜ・・・」

だが、不死をくれたのはグッジョブ！と宗也は付け加える。

「さてと、今はい……ん？」

ポケットに手を入れて携帯で時間を確認しようとした宗也に、バッグの底にあるメモが目に入る。

「なんだこれ？」

一旦携帯を取り出すのをやめ、メモに手を伸ばす。

開けてみると、最後に大きな字で『とある神より』と書いてあるのが見えた。

「神様からか、何を書いてある事やら……」

『さて、貴様がこれを確認しているということは、すでに転生が終わった、ということだろう。』

どうだ？私が上げた素晴らしい能力は？』

「もうちょっとかっこいいのが良かったよ！それにこれ東方だし！
！」

手紙だと言うのに、宗也は必死に自分の意見を吐き捨てる。

『まあそう言うな。これでも結構チートなレベルなのだぞ？問答無用の力で相手をねじ伏せる。貴様に

ぴったりの能力ではないか？まあ、これを完璧に使いこなすには、身体を鍛えることが大事だがな。

さて、本題に移ろう。

貴様を飛ばした場所は、学園都市内の学生寮だ。ちなみに部屋は上条当麻の隣だ。

日にちは7月19日。夏休みが始まる一日前だ。

全員の記憶は操作して、最初から貴様は学校に行て、特に上条当麻と土御門元春とは親友、というこ　とにしておいた。

これで伝えるべき内容は全て伝えた。それでは、検討を祈る。

とある神

様より』

「親切すぎるだろ神様っ!! 神様マジ神様!!」

何をいつているのかわからんが、とりあえず神様サイコーということだろう。

「っと、こんなことをしている場合ではない。時間っと。」

時間を見ると、9..42と表示されていた。

「・・・あつ。」

完全に、どう足掻いても大遅刻である。

☆
★
☆
★
☆
★

「・・・はあ、不幸だ。」

「何を終業式で遅刻したくらいで俺の台詞言ってるだよ。宗也は本当の不幸を知らない。そんなことでは序の口だ。」

「何で上から目線なんだゴラァ。」

授業を終え、帰り道で宗也はため息をはきながら言うが、それを当麻は何故か得意気に否定する。

「そんなやや少し微妙に不幸な宗也くんに、上条さんが飲み物を奢ってあげよう。」

「あ、俺コーヒーで。」

「じゃあ上条さんもコーヒーでいいか。」

当麻が自動販売機を指さしながら奢ってやると言ったので、宗也は自分の飲みたいものを言う。

当麻は自動販売機に近づき、財布を出す。

取り出したのは、二千円札。

それを当麻はふんふーんと鼻歌を歌いながら投入口に入れる。

あっ！と宗也が声を上げたがもう遅く。

コーヒーと書いてあるボタンを押しても、自動販売機が反応することとはなかった。

そして、冒頭に至る。

「・・・これが本当の不幸か、確かに。勉強させていただきました当麻さん。」

「・・・ああ、そうだ・・・」

☆
★
☆
★
☆
★

「元氣だせって、そんな事誰にだってある。」

「くそ！なんでもその自販は事あるごとに人の金を喰っていくんだ！」

「始めてじゃねーのかよ！！！」

とりあえず、哀れな当麻を慰めてやろう、と宗也は当麻をファミレスに誘った。

「あ、奢らねーから。」

「お前には慈悲の事はないんですか!？」

そして当麻は再びうがーっ!と声を上げる。

そんな当麻を見て宗也は意地わるい笑みをうかべる。

「ほら、そうこうしている間についたぜ。やけ食いしよう。あ、奢らねーから。」

「知ってるよ!二回も言うんじゃない!」

と、話している間にファミレスについたのでとりあえず二人は店内に入る。

「さて、何処に座ろうか。」

「ああ、・・・ん?」

「どうしたとうま・・・ってああ。」

当麻が急に視線を止めたので、宗也は不信に思い当麻と同じ方向を見る。

そこでは、茶色い髪をした女の子が、不良にナンパされていた。

あ、こいつ美琴だ、と宗也は心の中で思う。

御坂美琴。

常盤台中学の2年生で、学園都市第3位のレベル5の能力者である。

その女の子が、不良にナンパされているのだ。

「どうする当麻。助けるのk・・・って聞くまでもねえか。」

「ああ。助けるに決まってる。止めんなよ。・・・不良どもをな。」

「ん？すまん、最後聞こえなかったからもう一度いつてくれ。」

俺の言葉を聞かず、当麻は不良に近づいていく。

当麻は一回咳払いをし、男に言った。

「ちょっと君。彼女困っているじゃありませんか。・・・」

当麻はそこで言葉に詰まった、いや言えなかった、の方が正しいであらう。

なぜなら、男の後ろのからぞくぞくと、不良の仲間らしき男がでて

きたからである。

そして、仲間を止めようとしている当麻に「なんだてめえ。」やら
「やんのかコラァ！」やらなんやら言ってくる。

当然、そこから先はわかりきっている。

「不幸だ。」

当麻は深いため息と同時に呟いた。

☆
★
☆
★
☆
★

「はあ、はあ、はあ、」

「くっそ、なんっでおれも一緒に逃げなっきゃなんねんだよお！」

不良から逃げながら、宗也は当麻に不満を言いつける。

「ばっかやろうっ、不幸は分け合わなきゃなあ！」

「いらねえよそんなのっ!!」

不幸なんて誰が欲しいやついんだよ、と宗也は付け加える。

そう他愛もない会話を繰り返してる時、不意に宗也は止まった。

「何やってんだよ宗也っ!」

「もう追っきてないみてえだぜ、ほら。」

確かに前を見ると、不良達の姿は一人も見当たらなかった。

代わりに、先ほどナンパされていた美琴が、こちらへ歩いてきていた。

「どうやら、追ってこなかったのはあんたのおかげらしいな。」

「うん、めんどいから全員私が蹴散らしちゃった。」

そう言って美琴は髪をいじる。

その手から、にわかに電流がながれているのが見えた。

「これは感謝するべきなのかしないべきなのか、どっちなんだ？」

「俺らは何も頼んでねえし、感謝しないでいいんじゃないか？」

宗也の態度に、美琴は一瞬顔をしかめたが、すぐに元の顔に戻した。

「・・・ねえ、超電磁砲^{レールガン}って知ってる？」

美琴はコインを取り出しながら二人に問う。

嫌な予感、と宗也の第六感が危険を告げる。

「フレミングの運動量を借りて、砲弾を打ち出したりする物なんだけどーーーーー」

そして、美琴はコインを上へ弾く。

「こういう物をいうらしいのよねっ!!」

瞬間、美琴の指先から電撃が放たれ、轟音とともに二人の横をコインが遠ざかって行った。

遠ざかった後の地面には、くっきりと線が刻まれていた。

やっべー、と宗也は心の中で思う。

（これが超電磁砲^{レベルガン}か。直撃してたら綺麗な穴が開くんじゃねえか？）

顔面に穴が開いた自分の姿を想像し、宗也は身震いする。

「・・・まさか、連中を追い払うのにそいつを使ったのか？」

「馬鹿にしないでよ。私だってたががレベル0にコレを使ったりなんてしないわよ。」

「『たがが』だってよ。なんか人を見下しているように聞こえるんだが・・・」

そう俺が言くと、逆鱗に触れたのか、みるみるうちに美琴の表情が変わっていく。

もちろん、怒りの方向へ。

「・・・全く・・・強者の台詞よね、『それ』」

そして、美琴の身体から出ている電気がバチバチツと音をたてる。

「おいっ！俺もレベル0なんだけどっ！」

「俺、じゃなくて俺等、だがな。」

「うそっ！マジで！？じゃあこの場を誰が止めるっていうんだ！！」

「言ってなかったっけ？あ、それと止めんのお前。」

と二人で話している間に、美琴から「問答無用！」の声とともに、電撃が発せられた。

「んじゃあ、頼むわ。」

宗也は素早く当麻の後ろに避難する。

「おいっ！・・・くそお！！」

発せられた電撃を、当麻は右手でガードする。

当然、右手には『イマジンプレイカー幻想殺し』が宿っている為、電撃は軽々と右手に無効化されていた。

「で、その『レベル0』のアンタが、どうして『レベル5』の攻撃を受けて、無傷で立っていられるのかしら？」

「・・・お前なんていうか、不幸っつか、ついてねーよな・・・」

そして、当麻は獰猛な笑みを浮かべて、こう言った。

「お前、本当についてねーよ。」

そんな当麻の態度に腹を立てたのか、美琴の身体から先ほどより強い電気が発せられる。

「おい、落ちつけ。お前もだ当麻。一つ忘れているぞ、こんな所でどでかい雷撃が発せられたら、俺等の電化製品はどうなると思う？」

「・・・あつ。」

そして数秒後、俺等の頭上から一つの雷が落ちた。



「・・・暑い。」

蒸しかえるような熱気で、俺はいつもよりも早く目覚めた。

「ちつくしよお当麻の奴め・・・お前が挑発的な態度をとらなければこんなことにはならなかったんだ・・・」

誰もいない自室で、俺は愚痴る。

「くそ、こうなったら嫌がらせに当麻の部屋をもっと暑くしてやる・・・」

俺は自室にある加湿器を持ち、部屋を出る。

そして、隣にある当麻の部屋へ、ノックをせずに入る。

この時、ノックをしていれば、と後の俺は深く後悔した。

そこには、全裸で仁王立ちしている少女と、それを驚きながらもみている当麻の姿があった。

「・・・・・・・・え？」

第二話 『白いシスターさん、（当麻の所に）襲来』

幼女。

若い女性の事を指す言葉であり、だいたい小学生あたりの女性までを指す。

そんな幼女と、親友が一緒に向かい合っていて、しかも幼女の方が全裸だったら、君はどんな反応をする？

「・・・失礼しました。」

俺は静かに言うべきことだけを言って、扉を閉めた。

とある無能の集積強撃《h e a p b r e a k》

第二話 『白いシスターさん、（当麻の所に）襲来』

）10分後（当麻が誤解を解こうと奮闘した時間）

「なるほど、事情はわかった。」

「・・・はあ、補習前に何でこんな疲れなきゃなんねんだ・・・」

当麻がまるで一仕事終えた見たいに腕で汗を拭う。

「とりあえず、状況を整理しようと思う。よろしいかな？」

「ああ。」

「・・・っ」

ちなみに、当の幼女・・・失礼した、白いシスターさん、『インデックス禁書目録』は同時に二人の男に裸体を見られた為か、当麻うちのベッドの上で毛布にくるまり、蹲っている。

少しだけ、罪悪感はあったりする。

「まず、朝起きて布団を干そうとしたら、ベランダに幼女g「禁書
ツクス
目録!」」・・・失礼。禁書目録が既に干されていたと。既に突っ
込みどころ満載だが、ここで突っ込むと話が進まないのでスルーする。
」

幼女、と言おうとすると、禁書目録から怒声交じりの声がかかった
ので、とりあえず訂正する。

「そして、腹が減っているとされたので、適当に料理を作り、振
舞う。まあここまでは普通だな。そして次。彼女の来ている服が『
歩く教会』というなんかまあ丈夫でしかも異能の力の加護つきのや
つなので、とりあえず彼女の全裸が見たいから右手で破壊した、と
いうわけだな。

・・・お前は鬼か。」

「ちげえよ!」

適当に盛って話すと、当麻が必死に否定した。

一方の禁書目録は、ぶんぶんぶん、と首を縦に頷かせている。

「まあ、冗談はこれくらいにすつか。・・・次が本題だ。」

俺が真剣に切りだしたので、当麻も真剣な表情に変わる。

「問題は、この少女・・・インデックス禁書目録をこれからどうするのか、という話だ。飼うにしても、こいつは何を食べるんだ？ドッグフードか？」

「こいつはアホか。」

「うん、言動からして生粋のアホかも。」

くそ、二人にアホって言われた。特に禁書目録インデックスにアホと言われたのはきつい。

ちなみに、当麻から魔術の話は聞いていない、・・・俺を巻き込またくないんだろうな。

「おっと、こんなことをしている場合ではなかった。当麻、お前補習は？」

「っ！やっべえ忘れてた！！」

完全に忘れてたようで、当麻は慌てて支度を始める。

「あのさ、俺これから学校行かなきゃなんねんだけど、お前どうする？宗也と一緒に遊ぶか？」

「何故そこで俺が入る。」

あ、俺の成績はいい（当麻曰くとても成績いい）ので、補習は受けなくていいらしい。

グッジョブ神様。

「いい、出てく。いつまでも此処に居ると、連中ここまで追ってきそうだし。君だって、ここの部屋ごと爆破されたくないでしょ？」

「おっ、おい！待てよ！」

そこまで言うとは、禁書目録・・・ああめんどいからインデックスで。

インデックスはさっさと玄関の方へ向けて走り出した。

「待てったら！」

当麻がインデックスの後ろを追いかけるが、その時、何もない場所で躓き、手に持っていた携帯を落とし、よろけてその落ちた携帯を踏んだ。

「・・・不幸だ。」

「今日も平和だな。」

「君の右手、空気に触れてるだけで、幸運とか神の御加護とか、そういうのもまとめて消してしまっているから、不幸だと思うよ。」

「つまり、どういうこと？」

俺がそう言うと、インデックスはニコリと笑って、

「つまり、その右手が存在している限り、君の不幸は止まらないし、どんどん不幸になっていくってことだよ。」

「があは！」

インデックスの言葉を聴いて、当麻はショックを受けたのか、地に沈む。

「つまり、当麻がその右手を持って生まれてきたことが、不幸なんだな。なるほど勉強になった。」

「っ！・・・そんなことより！お前、ここを出て行くあてとかある

のかよ？」

「ここに居ると、敵が来ちゃうから。」

魔術師、ねえ。

あ、俺まだ魔術の事知らないことになってるんだっけ？

じゃあここはわからないふりしなくちゃっと。

「敵？なんだそれ。お前誰かに追われてんのか？」

「ちょっと宗也はあっち行ってくれないか？ここからの話はお前にはわからない。」

・・・当麻の優しさが身にしみるぜ。

しやぁない、ここは優しさにのっかってあげますか。

「・・・わーったよ。俺を抜きで内緒話なら、好きにやっってくださいいな。」

「ごめんな。」

気にすんな、と俺はつけて、俺はインデックスの隣を抜け、外へ出た。

「じゃあな、補習がんばれよ当麻。」

おう、という当麻の声を聴いて、俺はその場を後にした。



「暇だ。」

あの後、暇つぶしに色々な所を見て回り、昼食を食べ、再びぶらぶらした。

現在時刻、4時。

原作介入しようにも、気配をたどれん。

「まあ、そろそろ家へ帰りますか。そうすれば、自動的に原作介入だ。」

と、家への帰路を急ごうとした俺に、一つの光景が目に入った。

「あれは・・・インデックスか？」

屋根の上で、修道服を着た女の子が、男と女に追いまわされている。

「と、なると、必然的にあれば、神裂とステイルか。」

そして、たった今、インデックスが神裂に切られた。

背中から、鮮血が飛び散る。

だが、そんな状況でも、インデックスは逃げて行った。

切った神裂と、ステイルは呆然としている。

そしてその間に、インデックスの姿は見えなくなった。

「・・・これはいいチャンスかもな。」

初めての戦闘が神裂とは、俺死ぬね。と付け加える。

だが、俺は死ねない。

つまり、俺にははなっから負けることは入っていない。

あとは、どうやって勝か。

「さて、俺の修行の相手になってもらいませ。神裂さんよお。」

そして俺は、両足に力を溜めながら、二人がいる方向へ駆けだした。



魔術師「――」『神裂火織』は、その場で呆然としていた。

インデックスに逃げられた、からではない。

それは、

「・・・何故、彼女に刃が通ったのでしょうか・・・」

そう、鉄壁、いや無敵の防御を誇る、と言ってもよい『歩く教会』を纏うインデックスに、いとも簡単に火織の刃が通ったのだ。

「一体何故・・・」

そこへ唐突に、ある男が現れる。

「どうした？刃が通るはずのねえインデックスを切ったから、呆然としてんのか？・・・魔術師さんよお。」

不気味な笑みを浮かべながら、宗也は火織の前へ姿を現した。

「・・・何者ですか貴方。私たちの正体をしっているとは・・・魔術師ではないようですし・・・」

「誰、じゃなく何者、ときたもんだ。なかなかするどいね火織さんよお。」

「っ！！」

自分の名前までも知られている、と火織は一気に半歩下がり、警戒態勢に入った。

「貴方・・・本当に何者ですか、どこまで知って・・・」

「初対面の相手に質問攻めかよ・・・まあ、どこまで、と言われた

ら少し、と答えるに限るぜ、聖人さん。」

ここで、火織は一気に悟った。

この男は、危険。

と。

一気に後ろへ下がりが、腰に差してある刀、『七天七刀』へ手を添える。

「・・・魔法名は名乗らなくていいのか？」

「・・・私は魔法名は好きではないのですよ。」

そして、静寂。

「それじゃあ、始めようか。」

宗也の声が合図となり、二人の戦いが始まった。

第二話 『白いシスターさん、（当麻の所に）襲来』（後書き）

諸事情により（普通にテストが近い）ので、金曜日まで更新を中止します。

始まってすぐの小説ではありますが、何卒ご理解をよろしく願います。

第三話 『魔術師、神裂火織』（前書き）

テストが終わりましたので、普通どおり更新していきたいと思います。

第三話 『魔術師、神裂火織』

最初に動いたのは、火織。

『七天七刀』の柄を掴んだまま、呟く。

「・・・七閃。」

瞬間、火織の上へと延びていたワイヤーが、宗也へと襲いかかる。

火織の考えでは、この男がどうやって七閃を避けるのかを見て、そこから戦い方を考えていこうと考えていた。

だが、そんな火織の考えとは裏腹に、ワイヤーは宗也の顔へと直撃した。

とある無能の集積強撃《h e a p b r e a k》

第三話 『魔術師、神裂火織』

「・・・いたい。」

「・・・」

ワイヤーの直撃を受け、顔へ切り傷を作った宗也が、静かに言った。

「まさかこんなに早かったとは・・・全く見えなかった。」

だが、二回も『見た』。次は余裕だな。」

宗也の言葉に、火織は違和感を覚えた。

一回目は、今。

では、二回目はなんだ？

もちろん、火織は宗也と会ったのは初めてだし、七閃を見せるなんてこと当たり前のようにない。

じゃあ、いつ見たのか。

「ん？何やら考えているが、おそろく思っている通りだよ。この攻撃、俺は喰らう前から知っている。」

まあ、アニメでな。と、心の中で宗也は付け加える。

「・・・そうですか。それなら・・・」

避けてみてください！！」

タン、という刀が納められる音とともに、ワイヤーが宗也へと再び襲いかかった。

「っ！！」

だがそれを、宗也は避けず、『受け止めた』。

まるで、そこへ来るのが、分かっていたみたいに。

「ほらな、俺はもうこの技は見切っている。『七閃』は俺には通じねえよ。」

火織は、いとも簡単に自分の技が見切られるものなのか、と少し悔しかった。

「・・・っ、仕方ありません。それならば「『唯閃』」。！何故貴方がそれを！」

『唯閃』

それは『七天七刀』を使った抜刀術であり、一撃必殺といってもいいくらいの威力を誇る。

その技を、宗也は知っていた、その事に火織は余計に頭を混乱させ

る。

「いいのか？只の一般人にそんな聖人の力を使った一撃を使っちゃまって。それに、そいつはものすごく疲れるんだろ？」

それじゃあ、『避けられた』とき、お前の勝機はなくなるぜ？」

まるで、もう避ける事が確定しているような言い草。

そんな宗也を見て、火織は少し怒りがうかんだ。

「・・・まるでもう避けることが決まっているかのような言い草です。ね。先ほどから全く攻撃してこない貴方のどこにそんな自信が？」

「あつ、それちよいと違う。」

宗也はそんな火織の言葉を否定した。

「だって、今からするからな、『攻撃』」

そして次の瞬間、宗也は火織の視界から消えていた。



「だって、今からするからな、『攻撃』」

そう言ったと同時に、宗也は今までずっと足に『溜めていた』力を『地を蹴りだす』時に、解き放った。

そして、たったのひとつ飛びで、火織の後方へと跳躍した。

（うおっ！すげえこれ！！）

ちなみに、この力を使うのは宗也自身も初めてである。

だが、宗也はこの力が自分の中に初めから在ったような感覚であった。

まあそこは、神様のおかげであろう。

「っ！」

「女の子の顔を殴るのはかわいそうなんでなあ！腹で勘弁してやんよお！！」

そして、自分の持てる限りの全ての力を右拳に込め、火織の腹へと叩き込んだ。

もちろん、一度に溜めることはできないし、数十秒ごとなので、普通の打撃である。

「っーーーーぐう！」

宗也の打撃を受け、火織は地面へと倒れる。

「と、使い勝手がいいのか悪いのかわかんねえなこれ……」

せめて同時に溜めれるようにしてほしかった、と宗也は心の中で嘆く。

「ん？・・・なるほど。ほれ火織さんや、お仲間の魔術師さんが戦ってるぞ。」

そう言って宗也は指をさす。

その方向では、宗也と当麻の住んでいる学生寮で、火炎が立ち昇っていた。

「さて、てなわけでお仲間のステイルさんは無能力者の上条さんと戦っているわけです。」

「・・・それがどうしたのですか・・・」

戦う気などもう無いような宗也の態度に、火織はすっかりと戦う気をなくしていた。

「んでき、火織さんはあの戦いどっちが勝つと思う？」

「普通に考えてステイルでしょう。」

「ああー駄目駄目！」

いきなり声を張り上げ、宗也は否定する。

「ステイルと戦っている当麻を常識の範囲内で考えちゃダメダメ。あいつは普通の人間じゃねえ。」

「つまり・・・何を言いたいのですか？」

「当^{あいつ}麻を侮っている、痛い目見るぜっつーこと。まあ、俺が言いたいのこそんだけ。」

そう宗也が言うと、屋根の端へと歩き出す。

「あ、そういや名前を言っていなかったな。『瀬野宗也』。しがな
いただの高校生だ。じゃあな！」

そして宗也は、何十mはありそうな屋根の上から、何のためらいもなく落ちて行った。

「・・・何がしがないただの高校生ですか。全く・・・」

そう愚痴を漏らしている火織の口元は、微かに笑っていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6040y/>

とある無能の集積強撃《heap break》

2011年11月25日20時56分発行